

N
News

医学部ニュース

No. 326 / 2025, January

● Nihon University School of Medicine



医学部ニュース News & Topics



Contents

- 年頭にあたって.....2
- 学生生活.....5
- ニュース.....11
- 人事.....18





年頭にあたって

～夢なき者に成功なし～

医学部長 木下 浩作



新年あけましておめでとうございます。

日本大学医学部は、いよいよ今年3月に創立100周年を迎えます。昭和4年3月に医学科第1回卒業生134名を輩出して以来、「良き臨床医、優れた医学研究者、熱意ある医学教育者の育成」を教育目標として、医学教育・人材育成が行われてきました。昨年は、長年の懸案であった新学部棟や新病院棟の基本計画・設計に関するプロポーザル結果が日本大学ホームページに公開されました。現在、基本計画・設計のためのヒアリングが各部署で開始され、秋頃に新病院基本計画案が公開されます。基本構想は、既に医学部ホームページに公開しています。

これからも医学部と板橋病院、日本大学病院は、医療機関病院として継続的に質の高い医療を提供し、学生や研修医・専攻医教育を継続的に実践します。大学附属病院としてのプライドを持ち、地域住人の安全と安心を確保するために災害に強い病院づくりを目指します。そのためにも、今から実践できることは直ちに着手し、将来の地域医療を実践できる医師・看護師の育成のため、プライマリ・ケア教育をさらに充実させます。そして、すべての医師が習得すべき最新の医療技術を身に付けたチーム医療を実践できる環境整備を実現します。そのためにも医学部・病院の経営基盤の強化が必須です。

これまで医学部運営は、収支差額が常にマイナスであり、緊縮財政を反映した予算編成を行ってきました。しかしそれでは、縮小均衡が精一杯であり、医学部における将来計画は抱くことができません。好きな言葉に吉田松陰の「夢

なき者に理想なし、理想なき者に計画なし、計画なき者に実行なし、実行なき者に成功なし、故に、夢なき者に成功なし」(渋沢栄一も同様な言葉を残しています。)があります。医学部長になったばかりの頃、日本大学全体が大混乱している時であり、「夢みたくないことをいってる場合じゃない。」とお叱りを受けたことが多々ありました。しかし、彼らの言葉にあるように、夢を語れないと将来計画は立てられません。これからは厳しい財政状況の中で徒に支出を減らすのではなく、無駄を省き生産性の向上をもたらす改革を実行するための予算を策定する必要があります。ちょうど、昨年春に文部科学省から大学病院改革ガイドラインが出され、医学部でも大学病院改革プランを立案してホームページに公開しました。そのような意味合いから、令和7年度予算の編成は、医学部および病院の年次計画や将来計画(短期・中期計画)を見据えた医学部運営計画をたて、将来への人材育成や環境整備の実施に向けた検討を始めました。事前投資を行い、新たに大学設置基準に示された教職(教員・職員)協働による運営を達成するための意識改革・行動変容をさらに進める決意のもと、医学教育、学生支援及び研究に係る諸活動を支えるための施策を推進します。

新年を迎えるにあたり、今後も長期的な視野に立って成長戦略を考え、日本大学全体の価値を高める努力を始める年にしたいと思います。今この瞬間の医学部100年間の歴史を、次の100年に繋げるための始動の年に位置づけ、尽力いたします。本年もどうぞよろしくお願い申し上げます。





年頭にあたって

板橋病院長 吉野 篤緒

令和7年の新春にあたり、謹んで年頭のご挨拶を申し上げます。

皆さまには、穏やかな新春をお迎えのことと心からお慶び申し上げます。また、日頃より、日本大学医学部附属板橋病院に対しましてご理解とご協力を承り厚く御礼申し上げます。

昨年を顧みますと、国際的には、ロシアのウクライナ侵攻が続き、ハマス・イスラエル紛争の激化、また、アメリカの大統領選挙では、トランプ氏が勝利し返り咲きを果たしています。国内では、昨年1月1日に石川県能登地方を震源とした能登半島地震が発生し甚大な被害をもたらされました。そして、令和2年1月15日にわが国においても確認された新型コロナウイルス感染症がようやく落ち着きをみせた年でありました。また、経済が低迷し少子化が進む中、昨年石破茂首相（自民党総裁）が誕生しましたが、衆議院選では与党（自民党・公明党）が過半数の議席を下回りました。与党が過半数を割り込むのは、民主党政権が誕生した15年前の平成21年以来となり今後に不安を覚えます。令和7年は少しでも世界の安全と平和、落ち着きが戻る年になってほしいと心から願っています。

さて医学部は、1925年（大正14年）に専門部医学科として開設されていますので、創立100周年を迎えます。今年はそんな年なのですが、板橋病院としては、慢性的な人材不足の中、1) 経営改善、2) 耐震化整備事業、3) 新病院計画の3つの大きな金銭的な問題を含む課題に直面しています。令和5年度の医学部は、病院の収支が大きく影響するわけですが、8.28億円の支出超過（赤字）でした。ここ数年のなかでは大変な赤字になってしまいました。病院の耐震化は8月下旬に現場着手が予定され、令和10年10月末に終了が予定されています。そして、新病院に関しては、5月末日を目標に建設基本計画の草案作成が行われています。昨年の4月から病院執行部は新たな体制となり、課題を改善すべく鋭意努力してまいりました。現況は色々な面で厳しいですが、ピンチはチャンスとすべく、将来にできるだけ負の遺産を残さないように、そして、医学部の使命である「研究」「臨床」「教育」を忘れることなく着実に物事を進めていきたいと考えています。

皆さまの更なる努力・協力をお願い申し上げて、年頭ご挨拶とさせていただきます。

本年もどうぞよろしくお願いいたします。





年頭にあたって

看護専門学校長 大島 猛史

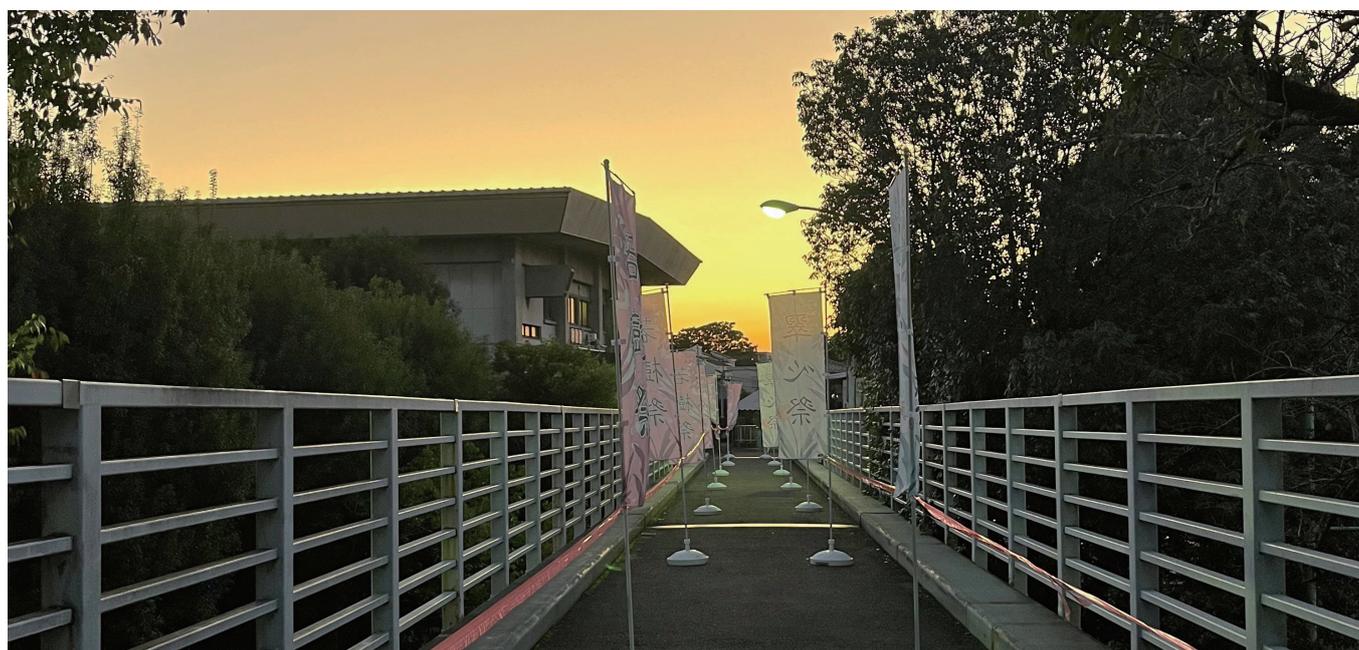
新年あけましておめでとうございます。教職員の皆さまにおかれましては健やかに新年をお迎えのこととお慶び申し上げます。昨年の元旦は能登地震がありました。学生の安否確認などあわただしかったです。今年は平穩に新年を迎えることができたのではないのでしょうか。

さて、1年前にわたくしは本稿で学習環境の改善が最大の懸案事項であることを述べました。校舎の耐震問題で本来の校舎が使えず、1年以上にわたり医学部の施設を使わせていただく状態になっていることによります。これまで在学生、教職員の皆様には多大なる不便を強いてきましたが、いよいよ新校舎が実現します。場所は現在のテニスコートのあるところです。昨年9月25日にホームページに公開した新校舎完成予想図ではシルバーを基調とした瀟洒で落ち着いた印象の3階建ての校舎です。各階に教室が、2、3階に実習室、1階に教務室が整備され、これからは充実した教育環境で学習ができることが期待されます。イラストでは校舎がぽつんと建っていますが、今後の板橋キャンパス整備計画の進展とともに医学部、病院の建造物と有機的に結合し、さらに高度な教育環境が形成されていきます。今年12月に竣工予定で、準備が整い次第、新校舎に引っ越

してきます。教職員、在校生にとって待ちに待った校舎です。これから出来上がっていく様子を間近に見ることが出来ます。楽しみにしててください。

昨年は63名が本校を卒業いたしました。その内、板橋病院には24名、駿河台の日本大学病院には12名が看護師として入職しました。近年の少子高齢化や18歳人口の減少を背景に、全国的に看護師のなり手が減少しつつある状況にあります。その中で本校の附属病院就職率は57.1%と高く、本校が本学での医療に大いに貢献していることが分かります。なお、深刻な看護師不足に対応するため、国レベルで看護師の働き方改革や給与面での改善、さらには看護師支援のための新たな法律の制定が検討されているところです。高度化する医療ニーズに応えるため本校ではこれからはリーダーシップや多職種連携のスキルを養うプログラムを充実し、本年も引き続き多くの優秀な看護師を世に送り出し、社会に貢献できるよう、教職員一同力を尽くしてまいります。

本年が教職員の皆さまにとって実り多き一年となるように祈念して新年のご挨拶とさせていただきます。



板橋区民まつり

板橋区民まつり「未来をめぐり、めくる絵本のまち板橋」に学生が参加

令和6年10月19日（土）・20日（日）に開催された板橋区民まつりに、板橋区6大学連携として医学部と看護専門学生計4名が参加した。板橋区民まつりを通じて、板橋区・区内大学・地元企業が一致団結して環境美化やSDGsのローカライズに関する取組を行うことで、来場者に向けて「自分が住んでいる素晴らしいまちを綺麗に守っていこ

う」という意識付けを促し、持続可能な未来都市いたばしの実現に寄与する目的で実施された。

学生は、ボランティアを通して、板橋区のSDGsへの取り組みを知る良い機会になったとともに、持続可能な街づくりの重要性を再認識した。



「翠心祭を終えて」

翠心祭実行委員長 高橋 秀一郎

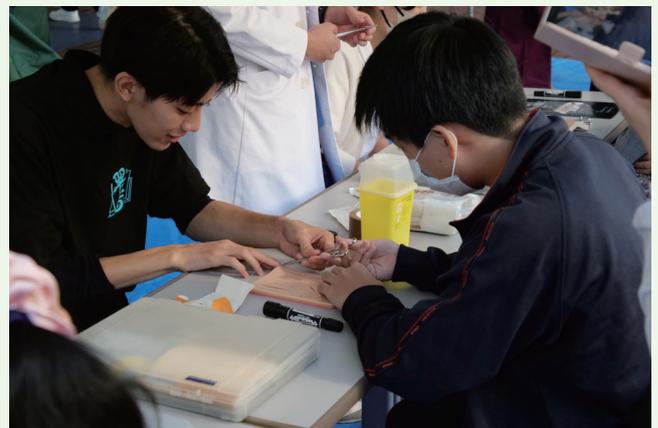
翠心祭実行委員長として今年の実行委員を率いていくうえで常に念頭においていた目標がありました。それは、翠心祭を通じて「日本大学医学部をより広く深く知ってもらおう」というものでした。日本大学はここ数年で様々な事件や不祥事の舞台となり、医学部はその筆頭とも言える存在でした。一人の学生としてこれから母校になる日本大学医学部がマイナスの印象で塗り固められたままになるのは許せませんでした。どんな印象をもった方であっても印象すらない方であっても、とにかく一度キャンパスに来て・見て・日本大学医学部を知ってほしい。その一心で準備を進めてきました。

新規の来場者を迎えるために、幅広い年齢層をターゲットとした新企画を構想しました。まずは、地元の子どもたちに翠心祭を楽しんでもらいたいと思い用意した、ドクターカー・DMATカー展示です。狙い通り多くの子どもたちが2台の内外を見てまわり、興味をもってもらうことができ、学生のみでは捌ききれないほど注目していただくことができました。運転席で写真を撮るお子様も多くおり大好評の企画となりました。想定外に子供たちだけでなく地域のご年配の方も興味を示していただくことができ、やってよかったと心から思います。また、2台の展示と付随して縫合体験企画も新たに行いました。実際に手術で使用する針や糸、器具を使用し多くの方に医学部ならではの体験をしていただくことができました。以上2つの企画はACLS部の協力により実現することができました。ありがとうございました。3つ目は、日本大学医学部版 Doctor's File です。これは、主に地域の方や受験生の保護者の方に日本大学医学部ではどのような研究を行っておりどのような教員が居るのかなどを深く知って頂けるようにするためのパネル展示企画でした。製作にあたり5名の先生方にアンケートやインタビューを行い、こちらも多くの好評の声をいただくことができました。挙げた以外にも新企画を設け多くの方に楽しんでいただけたことを嬉しく思います。

各方面から沢山の方に支えられ今年度の翠心祭を迎えることができ、昨年以上の大勢の方に翠心祭にお越しいただ

けたことを心から嬉しく思います。ご支援・ご協力を賜りました本当に多くの方々に心からの感謝を申し上げます。

校舎の建て替え計画もあり来年度の翠心祭の開催については未確定な部分が多いですが、ぜひ後輩にはさらに多くの方に日本大学医学部を知ってもらい魅力を伝えられる翠心祭を作って貰えればと思います。来年の翠心祭にもご期待ください。



「若樹祭を終えて」

若樹祭実行委員長 齋木 音葉

令和6年11月3日、4日の2日間、天候にも恵まれ若樹祭を無事終えることができました。今年度は「Album」をテーマに掲げ、実行委員一同準備してまいりました。来年で創立100周年を迎える日本大学医学部とともに、新校舎の建設が始まる看護専門学校をさらに盛り上げていこうと様々な企画を考えました。準備の段階から悩むことが多く、その度に実行委員と話し合いを重ねて解決していきました。私たちが企画した屋台やバザー、講演会、展示、医学部と合同の一日病院体験はいかがだったでしょうか。

屋台では、1年生がチュロス、2年生がクロッフルを出店しました。美味しさだけでなく見た目にもこだわり試行錯誤しました。行列ができるほど多くの方に購入して頂き、完売することができたことを大変嬉しく思います。

チャリティーバザーでは、医学部同窓会の先生方や理事会の皆様、教職員、学生から品物をご提供いただきました。販売の売り上げは、板橋区内の児童養護施設へ寄付して児童のために活用していただく予定です。

講演会では、介護老人保健施設の折目由紀彦先生をお招きし「高齢者施設におけるエンド・オブ・ライフケア」を

ご講演いただきました。折目先生の経験なども含めてお話をくださり、アドバンス・ケア・プランニングの大切さを学ぶ機会となりました。

看護学校の1、2年生は、「医療・看護に関わる偉人」、「医療用具や医療用語」についてまとめました。展示だけでなく、地域の方も参加できるようにクイズ形式に工夫したことで楽しむことができ、地域の皆様からも好評をいただくことができました。

若樹祭を通し、ひとつの行事を支える多くの人たちを取りまとめることの大変さや、準備が進むごとに関わる人の輪が広がる面白さを実感しました。物事をやり抜くことの大変さ、助け合う仲間の大切さを改めて学び、若樹祭が無事成功したことの喜びと共にやりがいや達成感を感じております。

最後になりましたが、若樹祭の開催にあたりご指導くださいました看護学校教員はじめ、医学部同窓会の先生方、翠心祭実行委員、学生の皆様はこの場を借りて深く御礼申し上げます。



東医体を振り返って

ゴルフ部

令和6年8月4日から8日にかけて第67回東日本医科学生総合体育大会が風月カントリークラブ（栃木）にて行われました。

結果は男子団体4位、男子個人で中村楽（3年）が3位

となりました。

選手だけでなく、キャディ、ギャラリー全員が一丸となって戦った結果だと思えます。来年は三傑に入れるよう、部員一同気を引き締めて練習に励んで参ります。



硬式テニス部（女子）

今年度の東医体で念願の優勝を果たすことができました。昨年度、あと一步で優勝を逃した悔しさを胸に、チーム一丸となって練習や試合などを通じ工夫、改良を重ねてきました。優勝が決まった瞬間、皆が自然に互いの手を取り喜びあった場面は忘れられません。

本当に多くの方々からご支援いただきました。この場を借りて、今年度主管校を務めてくださった獨協大学様はじめ東医体の運営に携わられた方々、日本大学、OB・OGの先生方に感謝を伝えさせていただきます。



柔道部

今年の第67回東日本医科学生総合体育大会は、仙台という遠方での開催となりました。慣れない環境下でしたが、新しく入部した1年生と東医体を経験した上級生たちとで力を合わせ、最後まで戦い抜きました。

男子団体では4人ながらも勝利を目指し、個人戦では攻めの姿勢を崩しませんでした。

女子無差別級では川村真由（6年）が見事優勝し、東医体無敗の伝説を残しました。

大会を通して、より一層柔道部の仲が深まったように思います。来年も好成績を残せるよう精進していきます。



陸上競技部

私達陸上競技部の東医体は栃木県のカンセキスタジアムにて行われました。天候に恵まれ、選手1人1人が本領を発揮できたのではないかと思います。今年も数多くの部員が入賞をし、更には男子団体にトラック5位、総合8位を獲得しました。

入賞者（個人）：

岡垣茉莉（3年）女子 800m 7位

吉城寺航（4年）男子 200m 3位

男子 400m 1位

北尾嘉章（6年）男子 1500m 1位（大会記録更新）

男子 5000m 2位

ここまで支えてきてくれた部員の皆さん、お忙しい中応援に来てくださったOBOGの先生に感謝申し上げます。来年度も好成績を残せるよう、部員一同、精一杯努力してまいりたいと思います。



水泳部

今年度の東医体は栃木県宇都宮市、日環アリーナ温水プールで行われました。シーズンの練習の成果を各部員が存分に発揮し、数多くの入賞者を輩出して大会に彩りを与えました。右に入賞者を紹介します。

【入賞者】

男子 200 m バタフライ	4 位 田辺凌 (医 6)	2:21.58
男子 200 m 自由形	6 位 田辺凌 (医 6)	2:06.02
男子 50 m 平泳ぎ	3 位 原拓也 (医 6)	30.36
男子 100 m 平泳ぎ	8 位 原拓也 (医 6)	1:08.53
女子 200 m 自由形	4 位 坂下珠実 (医 2)	2:30.77
女子 50 m バタフライ	8 位 坂下珠実 (医 2)	31.74



全医体を振り返って

バドミントン部

私達、男子バドミントン部は第 58 回全日本医科学学生体育大会バドミントン競技大会において準優勝という成績を収めることができました。今の現役部員にとっては初めての全医体出場で、準優勝できたのはとても嬉しく思います。

しかし、決勝では東医体で敗れた相手に再び負けてしまい、悔いが残る結果となりました。来年の東医体および全医体では今年以上の結果を残せる様に、1 年間部員一同精進してまいります。



◎日本大学医学部優秀論文賞（全体部門・若手部門）受賞にあたって◎

内科学系腎臓高血圧内分泌内科学分野 助教 小林 洋輝

この度、日本大学医学部優秀論文賞の全体部門および若手部門という大変名誉ある賞を頂き、深く感謝申し上げます。阿部雅紀教授をはじめ、本研究において多大なご支援をいただいた先生方、また研究に関わってくださったスタッフの皆様は心より御礼申し上げます。

今回の受賞対象となりました論文は、それぞれ *Science Translational Medicine* 誌 (IF: 17.1) に掲載された「Neuroblastoma suppressor of tumorigenicity 1 is a circulating protein associated with progression to end-stage kidney disease in diabetes」と、*Kidney International* 誌 (IF: 19.6) に掲載された「Results of untargeted analysis using the SOMAScan proteomics platform indicates novel associations of circulating proteins with risk of progression to kidney failure in diabetes」になります。本研究では、糖尿病関連腎臓病患者における血液検体を用いたプロテオミクス解析を通じて、新規バイオマーカーを同定し、末期腎不全の発症予測、および新たな治療標的を明らかにすることを目的としました。Aptamer 技術を用いた SOMAScan プラットフォームを採用し、1,000 種類以上の血中蛋白質を同時測定しました。その結果、将来の腎機能低下リスクが高い患者群において血中レベルで上昇している複数の蛋白質を明らかにし、糖尿病関連腎臓病の進行リスクを高精度に評価できる新たなバイオマーカーとしての可能性が示されました。その中でも、NBL1 (Neuroblastoma suppressor of tumorigenicity 1) の重要性が特筆されます。NBL1 は既報の *in vitro* の研究で BMP antagonist としての作用を持つことが示されており、MMP7/SMAD1/5 signaling を介した腎線維化の進展に関与する可能性が示唆されました。そこで行なった細胞実験では、NBL1 がポドサイトや近位尿細管細胞に障害を与え、アポトーシスを誘導することが確認されました。こうした研究成果は *Science* 誌の姉妹紙である *Science Translational Medicine* 誌のトップページに掲載されました。さらに現在リサーチセンターで進めている動物実験において、NBL1 ノックアウトマウスが腎線維化に対して保護的であることが確認され、NBL1 が腎機能低下の新たな分子メカニズムの一端を担う重要な因子であることが示されました。また、驚くべきことに予備的な実験で NBL1 ノックアウトマウスが心臓の線維化に対しても保護的であることが示されており、こうした予想外の結果から NBL1 を中心とした全身の線維化メカニズムの解明に研究が広がっています。

最近、学内外の若手の先生から研究や論文投稿に関する相談をいただく機会が増えていることから、私自身の経験をもとに、少しでも参考になるお話ができればと思います。本賞は Impact factor (IF) を一つの基準として受賞者が選定されると伺っておりますが、若手の先生には、ぜひ IF や論文数に

こだわりすぎずに研究の本質を追求していただきたいと思います。近年では、掲載料収入を目的とした粗悪なオープンアクセス誌が急増しております。こうした雑誌は、十分な査読を行わずに多くの論文を容易に受理し、総説論文を多数掲載することで IF が一時的に高くなる傾向がありますが、質の低い論文が公表されることで、研究の正当性や信頼性が損なわれる危険があります。若手の先生には、「効率」や「タイパ」を重視してこうしたジャーナルに投稿することで論文の本数や IF だけを追求するのではなく、時間をかけた質の高い研究にも興味を持って頂きたいと思います。例えば、質の高い基礎研究を一から完遂するには 10 年以上かかることが一般的です。査読やリバイスの過程だけで 1 年から 2 年かかることも珍しくはありません。しかし、そのような時間をかけた地道な研究にこそ重要な価値があると信じています。臨床や基礎実験においては観察される事実こそ最大の価値があります。その観察事実我真摯に向き合い、目的志向ではなく時間をかけて探求する姿勢が、革新的な発見の鍵となると考えています。IF が低くても良質なジャーナルは多く存在します。専門領域の主要学会が発刊するジャーナルや、歴史ある伝統的なジャーナルは、IF が高くなくとも厳格な査読過程を経て、質の高い研究を掲載している傾向にあります。若手の先生には、そのようなジャーナルにも逃げずに積極的に挑戦していただきたいと思います。

現在、私が主宰する主な研究プロジェクトには、(1) 臓器の線維化メカニズムの解明を目的とした基礎研究、(2) 糖尿病関連腎臓病のバイオマーカー開発、(3) 慢性腎臓病における循環 miRNA に関する基礎研究、(4) 脱分化脂肪細胞 (DFAT) を用いた糖尿病関連腎臓病の治療法の開発、(5) 維持透析患者におけるバイオバンクを活用した多施設共同コホート研究 (INFINITY 研究)、(6) 原発性アルドステロン症、高血圧の診療標準化を目的とした多施設共同研究、(7) 原発性アルドステロン症におけるプロテオミクスを用いた病態解明のための基礎・臨床研究、などが挙げられます。こうした研究は、日本国内はもちろんのこと米国や欧州をはじめとした 10 カ国以上の研究グループとの共同で進めており、その一部は米国腎臓学会や米国内分泌学会の公式ジャーナルに掲載されるなど成果が実り始めています (Kobayashi H, et al. *J Clin Endocrinol Metab.* 2024, Kobayashi H, et al. *Clin J Am Soc Nephrol.* 2024)。もし共同研究のアイデアがございましたら、いつでもお気軽にお声掛け下さい。

基礎研究、臨床研究は、多くの協力者と支援があって成り立つものであり、今回の成果も多くの方々のご支援の賜物です。今後も世界に発信される革新的な研究を続けていくため、日々の活動に邁進してまいります。最後に、日々の生活を支えてくれる妻に感謝し、締めくくらせていただきます。

● 「日本大学医学部優秀論文賞（若手部門）受賞にあたって」 ●

麻醉科学系麻醉科学分野 専修医 大島 雪乃

この度は栄誉ある優秀論文賞（若手部門）を授与していただき、誠にありがとうございます。研究の計画・実施、論文作成にあたり、ご指導いただきました先生方には厚く御礼申し上げます。また、基礎実験の実施にあたり実医研のスタッフの方々、審査や研究費公募手続きなど事務を取り扱ってくださっている研究事務課の皆様にもお力をいただき、重ねて御礼申し上げます。

今回受賞の対象となった論文は、“Midazolam exhibits antitumour and anti-inflammatory effects in a mouse model of pancreatic ductal adenocarcinoma” ミダゾラムの膵癌自然発症マウスにおける抗腫瘍・抗炎症効果と癌性疼痛の改善効果で、British Journal of Anaesthesia [Impact factor 9.8 (2022)] に掲載されました。

本研究は2019年から大学院に進学し、指導教授の鈴木教授のもとで行った研究です。“悪性腫瘍に対する麻酔薬の効果”という研究テーマをいただいたのですが、その背景として、近年手術中の麻酔・周術期管理が患者の長期予後に影響することが報告されていることがあげられます。鎮痛・鎮静薬のなかには細胞性免疫を抑制することが知られていますが、膵癌におけるミダゾラムの効果は未だに不明であるため、ミダゾラムの膵癌に対する抗腫瘍・抗炎症効果ならびに癌性疼痛への影響を明らかにすることとしました。

膵癌の自然発症モデルであるKPPCマウス(LSL-KrasG12D/+;Trp53flox/flox;Pdx-1cre/+マウス)を用いて検討を行いました。遺伝子組換え実験委員会と動物実験委員会の承認を得て実験を開始しました。膵癌マウス

をミダゾラム投与群(M群)、非投与群(C群)の2群に分け、M群ではミダゾラムを連日経口投与しました。エンドポイント時に膵腫瘍ならびに全身諸臓器をサンプリングし組織学的解析を行いました。また、膵癌細胞株を用いた増殖能への影響をAlamarBlue法により検討しました。

本論文の結果は、以下の通りです。

- ・2群間の生存期間と膵腫瘍の体積(M群425 mm³, C群775 mm³)では有意差が認められなかったが、癌細胞の増殖力を示すKi-67陽性率はM群で有意に低下していた(M群16.5%, C群30.5%)。

- ・腫瘍進展に関わるArginase-1+M2様癌関連マクロファージ(TAM)の局所浸潤が有意に抑制された(M群655.6 cells/mm², C群1945.8 cells/mm²)。一方、腫瘍促進的に働くMPO+好中球、腫瘍抑制的に働くiNOS+M1様TAM、CD8+リンパ球は有意差が認められなかった。

- ・ミダゾラムは膵癌細胞株の増殖能をin vitroで抑制した(IC₅₀=22.9 μM)。

以上の結果から、ミダゾラムは膵癌細胞の増殖能を抑制する一方で、腫瘍促進的に働くM2様TAM浸潤を抑制させることで抗腫瘍効果ならびに抗炎症作用を発揮することが考えられました。ミダゾラムは膵癌患者の手術時における全身麻酔の導入および維持に有用であることが示唆されます。

大学院に入学するまでは、基礎研究にふれる機会は少なかったのですが、実際に始めてみると、色々と考えながら実験をすることが非常に面白かったです。今後ともご指導ご鞭撻のほどよろしくお願いいたします。

● 日本大学医学部優秀論文賞（全体部門）受賞にあたって ●

生体機能医学系生化学分野 助教 梅田 香織

この度は荣誉ある日本大学医学部優秀論文賞（全体部門）を授与いただき、誠にありがとうございます。また、研究委員会の審査委員の先生方、そして推薦くださいました生化学分野の槇島誠教授に感謝申し上げます。

今回、受賞いただきました論文は、平成30年より日本大学海外派遣研究員として出張したコロンビア大学において従事した研究成果です。私はこれまで非アルコール性脂肪肝炎等の病態モデルマウスを用いてコレステロール代謝調節に関与する核内受容体である肝臓X受容体 (liver X receptor, LXR) の免疫細胞における機能解析に従事してまいりました。肝臓を始め各組織には非常に多様な免疫細胞が存在し、互いに相互作用しながら貪食、炎症など多岐にわたる機能を発揮し、代謝や障害などの異常事態に対処します。そこで、病巣に集積する免疫細胞のより高度な解析技術を習得するために、動脈硬化研究の世界的権威である Alan Tall 教授の研究室を訪問いたしました。

近年の単一細胞あたりの遺伝子発現を網羅的に解析するシングルセル解析技術の進歩により、動脈硬化巣には泡沫化マクロファージの他にも様々な免疫細胞が集積することが明らかとなりました。LXR はコレステロールの代謝調節

を担う転写因子であるため、既に抗動脈硬化因子として知られておりましたが、病巣の免疫細胞における詳細な機能解析は行われていませんでした。本論文では、LXR 欠損マウスを用いて動脈硬化モデルマウスの免疫細胞についてシングルセル解析を用いて解析し、LXR 欠損により通常は脂質代謝等を担う非炎症型マクロファージが炎症誘導型に変換することで病態進展を促す LXR の新規制御メカニズムを明らかにいたしました。

出張中の令和2年には COVID-19 の感染拡大によるニューヨーク市のロックダウンにより、研究活動の縮小及び一部中断を経験いたしました。不完全燃焼のままコロナ禍の最中に帰国いたしました。Tall 教授や研究室のメンバーの多大な協力により論文化することができ、Editor's Pick にも選出していただきました。また、習得したシングルセル解析技術を帰国後の自身の研究への応用及び本学の研究活動の発展に貢献するため、本学内にシングルセルライブラリー解析装置を設置いたしました。既に数検体の解析に成功しておりますので、ご興味をお持ちの先生がいらっしゃいましたらご連絡いただければ幸いです。

日本大学医学部ダイバーシティ推進委員会企画

5年生交流会

日本大学医学部ダイバーシティ推進委員会委員
病態病理学系微生物学分野
教授 相澤 志保子

令和6年10月19日にダイバーシティ推進委員会企画として、医学部5年生の交流会をリサーチセンター4階ホールにて開催しました。ダイバーシティ推進委員会は多様性のある委員で構成されており、学生の代表として毎年5年生の学生2名が学生委員として活動しています。今年の5年生は新型コロナウイルス感染症パンデミック緊急事態宣言下の2020年に入学し、入学式・開校式も中止になった学年です。ダイバーシティを考える上で、改めてお互いのことをよく知ろう、というコンセプトで、交流会を企画しました。5年生は月～金は実習班に分かれての病院実習ですので、全員が集まる土曜日の臨床講義の後に交流会を行いました。学生委員の服部裕太さん、樋口美羽さん司会のもと、ダイバーシティ推進委員会委員の相澤から簡単に交流会の趣旨を説明し、医学部次長の日台智明先生の乾杯のご発声で会は始まりました。時刻もちょうどお昼時だったので、まずは皆でランチを食べました。初めは少し戸惑いがあり硬い雰囲気もありましたが、ランチを食べて自由に話をしているうちにだんだんとほぐれてきて、笑い声も大きくなってきました。一段落ついたところで、4～5人のグループに分かれて「新しい医学部キャンパスに望むこと」「どんな病院で働きたい?」「30年後の医学教育はどうなっている?」「30年後の医療はどうなっている?」「理想の医学教育は?」「解剖実習は医学教育に必須か?」「医療と多様性」などのトークテーマについてグループディスカッションを行い、各グループの代表者に、話し合った内容を簡単に発

表してもらいました。「どんな病院で働きたい?」については、将来性のある病院でオンオフがはっきりつけられる働き方がしたい、「新しい医学部キャンパスに望むこと」には、綺麗なトイレが必要、というような意見が出ました。また、ほとんどのグループで、解剖実習はファーストタッチとして医学教育に必須、という意見でした。最後に5年生の担任の林孝彦先生からご感想をいただき、ダイバーシティ推進委員会委員長の増田しのぶ先生のお言葉で締められました。土曜日の午後ということもあり、部活や各自の都合で参加できない学生もおりましたので、学生の参加人数は21名にとどまりましたが、これを機に学年の絆が深まり、多様性について考えるきっかけになれば幸いです。なお、本会の準備には庶務課のダイバーシティ推進委員会の委員、幹事の皆様に大変ご尽力いただきました。



追悼法要

令和6年10月12日（土）午前11時より、築地本願寺にて令和6年度日本大学医学部追悼法要が厳かに営まれた。献体された故人の有効なご厚志に感謝を捧げ、医学の発展に貢献されたその崇高な精神に深く敬意を表し、追悼の誠を捧げた。

厳粛な雰囲気の中で、約300名の教職員、学生、そして献体された故人のご遺族が参列し、故人の冥福を祈った。特に、コロナ禍で参列できなかった近年に比べ、今年は多くのご遺族が直接会場に足を運び、故人に花を手向ける姿が見られた。

また、昨年に引き続きライブ配信を実施し、全国各地から多くの視聴者につながった。アーカイブは令和7年3月末まで視聴可能である。

本学は、今後も献体された故人のご厚志に深く感謝し、追悼法要を継続して執り行うとともに、医学教育・研究の発展に尽力していく。



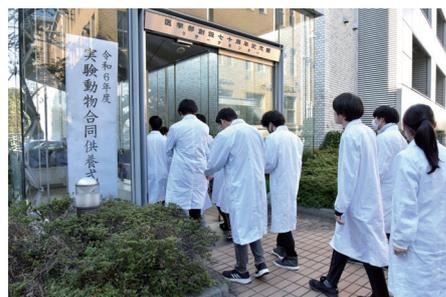
実験動物合同供養

令和6年度医学部実験動物合同供養が、11月13日（水）リサーチセンター4階ホールにて午前11時より執り行われた。静寂なホールの中で、読経の声が響き渡り、参列者一同は実験動物の霊に深く感謝の気持ちを捧げた。

今年度は、教職員に加え、医学部1年生が参列。将来、

医師となる学生が実験動物の尊い命に対する感謝の気持ちを深め、倫理的な意識を高める貴重な機会となった。

供養式には教職員69名、終了後の焼香には教職員27名、学生128名の計224名が参列し、医学部実験諸動物の霊の冥福を祈った。



白菊会連合会 令和6年度総会

機能形態学系生体構造医学分野 金川 太郎

白菊会連合会総会が令和6年11月10日(日)に日本大学法学部大講堂にて執り行われました。すっきりしない天気の中 300名を超える会員様に参加いただき盛会裏に終えることが出来ました。

総会では文部科学省高等教育局医学教育課長 俵幸嗣様、日本解剖学会理事長 寺田純雄先生、日本篤志献体協会理事長 坂井健雄先生、篤志解剖全国連合会会長 佐藤二美先生からご祝辞を賜りました。またコロナ禍を経て5年振りに再会されたアトラクションですが、日本大学歯学部の植田耕一郎先生が「超高齢社会における健康法と健康観」という演題で講演され、熱心に耳を傾ける人の姿が多く見られました。

「献体」とは医学・歯学における人体解剖学の教育・研究に役立たせるため、自身の遺体を無条件・無報酬で提供することをいいます。ご本人の意思とご家族のご理解のもと、生前から献体を希望する大学もしくは団体に献体登録をす

ることにより、ご逝去後献体が実行されます。

献体は北海道から沖縄まで、全国の大学(医学部・歯学部)で行っておりますが、その献体の会のひとつである「白菊会連合会」は、東京近郊の9大学13学部で構成されており、日本大学医学部も加盟校として「日本大学医学部白菊会」として活動を行っております。

献体という崇高な精神は解剖実習を通じて生命の尊厳、医の倫理を自覚させてくれる貴重な体験であり、医師の育成に医学教育の根幹として大きな役割を果たしております。献体登録者の崇高な意志と御家族の理解があり成り立っていることを忘れずに、これからも研鑽していきたいと考えております。

来年度の白菊会総会は令和7年10月28日(日)に東京大学安田講堂にて開催される予定です。興味のある方は生体構造医学分野にお声掛けいただけましたら幸いです。



日本医療検査科学会第 57 回大会のお知らせ

61 回生

病態病理学系臨床検査医学分野 中山 智祥

としました。このポスターの大型船のように大海原に出航するような気構えをもって準備し臨みたいと思います。

この度、日本大学医学部病態病理学系臨床検査医学分野の私中山智祥が日本医療検査科学会第 57 回大会（2025 年 10 月 3 日(金)～5 日(日)）の大会長を担うことになりました。日本医療検査科学会大会は一般社団法人日本医療検査科学会が年に 1 回開催する大規模な学会大会であり、3 年連続でパシフィコ横浜にて開催された後、1 回神戸国際会議場で開催されています。2025 年の第 57 回大会は 2023 年、2024 年に引き続いてパシフィコ横浜で開催されることになります。2024 年、パシフィコ横浜の会議センターで行われた大会には約 3,000 人の会員が参加するとともに、併設の展示ホールで大規模に行われた臨床検査機器・試薬・システム展示会には 8,000 人超の参加者を数えました。臨床検査関係の学会大会では基本領域の専門医制度を担う日本臨床検査医学会学術集会、一般社団法人日本臨床衛生検査技師会が主催する日本医学検査学会と並んで最大規模の学会大会です。

例年の学会大会では医師、臨床検査技師、企業、研究者の方々など多職種が参加されたので第 57 回大会でもあらゆる職種の方々に参加され、興味を持っていただけるようなプログラムを作成したいと考えています。テーマを「変革の好機に挑戦しよう！（Challenge the chance for change!）」

医学部懇談会

令和 6 年 11 月 16 日 (土) 午後 6 時より、如水会館にて、同窓会支部長会・卒業年次代表者会に引き続き、医学部懇談会が開催された。名誉教授、客員教授、元教授、研究所教授、関連病院長、他大学で活躍の同窓生、同窓会役員、教職員ら総勢約 120 名が参加し、盛況のうちに幕を閉じた。

懇談会では名誉教授や執行部等からのお言葉をいただき会場からは温かい拍手が送られた。また、教室紹介や年間行事を映した動画の上映もあり、昨年同様、参加者同士が闊達に意見交換を行い、親睦を深める機会となった。





三浦 義正

【教授】 内科学系消化器肝臓内科学分野
令和6年2月1日就任

令和6年の2月1日付けで日本大学医学部内科学系消化器肝臓内科学分野の教授として赴任いたしました。現在は日本大学病院の消化器肝臓内科の科長として勤務しております。

私は広島県出身で、平成11年に自治医科大学を卒業しました。色々紆余曲折はありましたが、自治医科大学内科学講座消化器内科学部門の主任教授であられる山本博徳先生に師事し、ダブルバルーン内視鏡 (Double-Balloon Endoscopy: DBE) と内視鏡的粘膜下層剥離術 (Endoscopic submucosal dissection: ESD) を中心とした消化管診断・治療を行ってまいりました。中でも上部消化管領域の早期悪性腫瘍に対する内視鏡診断と治療の発展に従事してまいりました。前述した DBE, ESD, そして画像強調内視鏡 (NBI, BLI) の発展に黎明期から携わられたことは大変幸運であったと思います。近年では早期胃腫瘍の同定に関する研究に携わり、富士フィルムが開発した Linked color imaging (LCI), 人工知能 (Artificial Intelligence: AI) による内視鏡補助診断機器の開発にも携わることができました。治療においては、pocket-creation method (PCM) という新しい ESD 治療戦略の普及に尽力し、最難関治療であった十二指腸 ESD

の治療成績向上や、胃 ESD に関しても若手医師と協力し多くの論文を報告することができました。

さて、私の赴任した日本大学病院は駿河台にある 320 床の中規模病院です。交通アクセスに優れた立地である反面、周囲には大学病院が乱立しており、特色を出して診療に当たらなければ患者様にも選んでいただけない厳しい環境に飛び込んだ形になりました。内視鏡室は幸い使い慣れた富士フィルム社製の内視鏡で固められており、現在も富士フィルムメディカルから支援を受けながら最新の機器で診療・研究することができる環境は整っています。また消化器肝臓内科は木暮主任教授を中心に若手中心の医局です。人手不足は否めませんが、その分若手には大きなチャンスが転がっており、10年で大化けすることができるポテンシャルを秘めた医局と考えています。

私の掲げる大きな目標は、1) 内視鏡診療の国際化、2) 最新の内視鏡機器開発、3) 内視鏡教育の3本柱です。若手が楽しくかつ自主性をもって診療・研究ができる環境を整え、そして持続可能な医局運営を目指して日本大学の卒業生を中心に10年後を背負っていける人材を育てていくのが大きな目標です。どうぞ末永くよろしく願いいたします。



相澤 志保子

【教授】 病態病理学系微生物学分野
令和6年4月1日就任

令和6年4月1日付で微生物学分野の主任教授を拝命いたしました。私は平成14年に本学を卒業し、産婦人科に入局いたしました。平成16年に本学大学院医学研究科に入学しましたが、在学中に国立感染症研究所エイズ研究センターに国内留学をする機会に恵まれました。平成20年に学位を取得後、微生物学分野の助手、平成23年に助教、平成26年に准教授となり、前任の早川教授のもとで、学生教育と研究に携わってまいりました。我々の教室は基礎医学の「微生物学」「免疫学」の教育を担当しています。本学の卒業生の多くは臨床医となりますが、どの診療科でも感染症の診療は避けられません。また、近年、生物学的製剤や免疫チェックポイント阻害療法など、免疫のメカニズムを利用する医療が一般的になってきました。臨床につながる「微生物学」「免疫学」を目指して、学生教育に取り組んでおります。研究面では、大学院時代より継続している抗酸菌に対する免疫応答の研究と生殖における免疫の役割の研究に加え、組換え BCG の手法を用いた新たなワクチン開発や、母子感染メカニズムの解明などに取り組んでいます。当分野には臨床科からの大学院生やさまざまな臨床バック

グラウンドを持った研究者が多く在籍しており、教室としては女性生殖器の常在微生物叢、免疫不全患者の常在微生物叢・ワクチンへの応答能、真菌の病原因子、胃腸炎の原因となるウイルスの分子疫学的解析、先天性代謝疾患の新規治療法の開発など、多彩な研究を進めております。令和2年以降の COVID-19 流行期には母子感染と妊婦に対するワクチンの全国調査や、感染妊婦の胎盤の解析、全国の産婦人科医と患者さんへの情報発信なども行ってきました。歯学部や松戸歯学部、生物資源科学部などの他学部との共同研究も積極的にすすめています。また、タイ、ベトナム、バングラデシュ、パキスタン、韓国、米国などの研究者と国際共同研究を行っています。今後も、医学部の他分野、臨床の先生方とさまざまな研究をしていきたいと考えております。

本学は令和6年に創立100周年を迎えますが、この時期に母校の主任教授を拝命したことを大変光栄に存じます。これからの新しい100年に向けて、日本大学医学部そして日本や世界の医学・医療を背負って羽ばたく学生と若手研究者の育成に尽力する所存です。ご指導ご鞭撻のほど、どうぞよろしく願い申し上げます。



大塚 雄一郎

【准教授】 社会医学系公衆衛生学分野
令和5年12月1日就任

令和5年12月1日付で社会医学系公衆衛生学分野准教授を拝命いたしました。私は平成19年に日本大学医学部を卒業後、平成22年に糖尿病代謝内科学に入局しました。その後、予防医学に関する研究を行うため、平成28年に公衆衛生学分野に異動しました。睡眠、喫煙、飲酒、ストレス対処などの生活習慣や労働者の健康やプレゼンティズムに関する疫学研究を行っております。同時に、米国のJohns Hopkins大学の公衆衛生大学院で研鑽を積む機会をいただき、エビデンスに基づいた政策形成の重要性や、現実のニーズと科

学的知見の統合など利害関係者との調整を学びました。

これまでの経験を生かし、学生に実践的な公衆衛生の知識やスキルを伝えることに加え、社会に貢献できる研究を推進していきたいと考えています。医学部においては産業医業務を行っており、職員や教員が健康に働けるための環境づくりを行っていきたく思っております。また、地域や国際社会と協働し、幅広い公衆衛生の課題に取り組むことで、誰もが健康で暮らせる社会の実現を目指していきます。今後ともご指導ご鞭撻のほど何卒よろしくお願い申し上げます。



松田 彰

【准教授】 視覚科学系眼科学分野
令和6年1月1日就任

緑内障手術を専門にしています。緑内障は我が国における中途失明原因で一番頻度の高い疾患で、眼圧を下げることが唯一エビデンスのある治療法です。難治例、重症例の手術も多数施行しています（令和5年度実績は325眼）。古典的な線維柱帯切除術に加えて、低侵襲緑内障手術、チュー

ブシャント手術、内視鏡下毛様体凝固術など本邦で施行可能な手術の全てに対応可能です。また角結膜疾患や網膜疾患に続発する緑内障に対してそれぞれの専門家と協力してトータルなケアを提供します。板橋病院、日大病院で診療・手術をしており、眼科専門医の先生方からのご紹介をお待ちしております。どうぞよろしくお願い申し上げます。



鈴木 潤一

【准教授】 小児科学系小児科学分野
令和6年2月1日就任

令和6年2月1日付で小児科学系小児科学分野准教授を拝命いたしました。私は平成14年に日本大学医学部を卒業し、同年に同大学小児科学講座に入局いたしました。研修、関連病院の出身を経て、主に駿河台日本大学病院小児科で小児診療に従事しておりました。平成25年には国立成育医療研究センター分子内分泌研究部共同研究員として、主に小児1型糖尿病のmiRNAにおける多型解析や眼症状を合併する複合型下垂体機能低下症の遺伝子および表現型解析などを行い、疾患発症のメカニズム解明についての基礎研究を行ってまいりました。平成26年からは小児科学系小

児科学分野助教として日本大学病院小児科で勤務し、診療では小児内分泌・糖尿病の専門外来診療を中心に行い、研究においては小児1型糖尿病における予後改善に関連した臨床研究を主に行ってきました。また、糖尿病専門医研修ガイドブックや小児・思春期糖尿病コンセンサスガイドラインの策定にも参画しております。

現在は日本大学病院小児科の外来医長、教育医長として従事しており、引き続き小児内分泌・糖尿病診療をより充実させ、ならびに学生教育、卒業教育に尽力したい所存です。今後ともご指導の程、何卒よろしくお願い申し上げます。



中川 喜子

【准教授（任期制）】 内科学系呼吸器内科学分野
令和6年2月1日就任

令和6年2月1日付で内科学系呼吸器内科学分野の准教授を拝命いたしました。私は平成13年に日本大学医学部を卒業後、同年5月より日本大学医学部第一内科学講座に入局し初期臨床研修を行い、平成19年から呼吸器内科学分野で研鑽をつんで参りました。医局の諸先輩方の指導を仰ぎながら、内科認定医・総合内科専門医、呼吸器専門医・指導医、気管支内視鏡専門医・指導医を取得しております。肺癌診療に興味を抱くようになり、肺癌の個別化医療をテーマに研究を行い、平成26年に博士号を取得いたしました。平成29年には呼吸器内科教育医長を担い、BSLをはじめと

する学生教育に力を注ぎました。平成31年からは呼吸器内科病棟医長として、医局の先輩や後輩、他科の先生方のお力を借りながら、患者様に最もよい医療を提供できる様に努めております。今後、肺癌診療においては遺伝子パネル検査を用いた診断や治療は必須になると思われ、地域において肺癌ゲノム医療の中核的な役割を担うべく症例を蓄積するよう努力しており、臨床研究も積極的に行っております。これからもより一層、日本大学が発展し、患者様や後輩の力になれるよう邁進していく所存ですので、ご指導ご鞭撻のほどよろしくお願い申し上げます。



石原 正樹

【准教授】 内科学系神経内科学分野
令和6年4月1日就任

令和6年4月1日付で内科学系神経内科学分野の准教授を拝命いたしました。私は平成15年に日本大学医学部を卒業し、内科学系臨床研修修了後、同大学神経内科に入局しました。平成21年に学位を取得、日本大学医学部附属板橋病院、島根大学医学部附属病院で研鑽を積み、平成27年7月1日より日本大学医学部の助教として赴任し、脳神経内科の診療に従事しております。専門は中枢神経感染症ですが、平成30年10月から板橋病院でAntimicrobial Stewardship Teamの末席にても活動しております。多職種で協働して

一つ一つの事象や症例を大切にすることを信条としています。専門資格としては、内科学会、神経学会、脳卒中学会、老年医学会、認知症学会の専門医と指導医、感染症学会、頭痛学会の専門医を取得しております。教育施設の維持・発展、新たな専門医誕生に寄与したいと存じます。教育においては、現場での体験を通じた実効性のある知識や技術の伝達が肝要と考えます。医学部教員として、研鑽を積む先生方、学生医、医学生の皆様の成長と発展の一助となりますように精進いたします。何卒よろしくお願い申し上げます。



奥村 康弘

【准教授】 外科学系消化器外科学分野
令和6年4月1日就任

令和6年4月より消化器外科学分野准教授として主に胃癌の診療を担当しております。平成18年3月に東京大学医学部を卒業し、その後東京大学医学部附属病院胃食道外科、がん研有明病院消化器外科、カロリンスカ医科大学病院外科（スウェーデン）等での勤務を経てこちらに伺いました。胃癌の手術、特に腹腔鏡手術とロボット手術を主に行い、後輩の指導にも当たって参りました。日大板橋病院では胃癌に対する鏡視下手術は導入が遅れておりましたが、今年度に入り手術

の6割以上を腹腔鏡手術で行うようになり腹腔鏡下噴門側胃切除、LECS（腹腔鏡内視鏡合同手術）など新しい術式も導入しました。また、ロボット支援下胃切除術についても10月末で施設基準をクリアすることができ、導入に向けて動き出したところです。勤務を始めて約8カ月、徐々に慣れてきた一方で高齢患者やステージ4の切除困難症例が多いことなど、この地域が抱える問題点も見えて参りました。よりよい医療を提供できるよう、微力ながら精進していきたいと思っております。何卒よろしくお願い申し上げます。



乙田 敏城

【准教授】 内科学系総合診療学分野
令和6年4月1日就任

このたび、総合診療学分野の准教授に就任いたしました乙田敏城です。これまで臨床医として糖尿病や生活習慣病を中心とした診療を行う傍ら、肥満が糖尿病やその合併症の発症・進展に関与する機序の解明をテーマに研究を進めてまいりました。特に、タンパク質分解系の機能不全がオルガネラストレスを介して病態を悪化させる機序を、基礎研究と臨床研究の両面から取り組んでおります。

現在の研究テーマは、タンパク質分解系の機能不全がオルガネラストレスを通じて自然炎症や組織障害を誘発する

機序の解明です。この知見を活かし、慢性疾患の新たな治療法を見出すことを目指しております。また、臨床現場での経験を基に、患者さんの視点に立った医療と研究の橋渡しを目指したいと考えております。

今後は、日本大学医学部の教育、研究、診療のさらなる発展に寄与できるよう努めてまいります。医学部の皆様、そして大学全体の多くの方々と協力しながら、医学部の新たな可能性を切り拓いていく所存です。

何卒よろしくお願ひ申し上げます。



深町 大介

【准教授】 内科学系循環器内科学分野
令和6年4月1日就任

令和6年4月1日付で医学部内科学系循環器内科学分野の准教授に就任いたしました深町大介（ふかまち だいすけ）と申します。この度、この名誉ある職務を拝命しましたことを、心より光榮に存じます。

私は平成16年（2004年）に日本大学医学部を卒業後、初期臨床研修を日本大学医学部板橋病院で修了し、その後、循環器内科学分野（平山篤志教授）のもとで循環器診療を開始しました。その後、心臓カテーテル検査の技術をさらに磨くため、心臓血管研究所病院にて3年間の研修を行い、日本大学医学部板橋病院救命センターCCUに復帰い

たしました。さらに、径カテーテル大動脈弁留置術（TAVI）の治療に取り組むため、2022年より日本大学病院へ勤務先を移しております。

今後も、これまで取り組んできた心臓カテーテル治療に加え、TAVI治療を通じて、より多くの患者様に貢献してまいりたいと考えております。また、奥村恭男教授、松本直也教授のご指導のもと、循環器画像診断などの研究を進め、研究活動の推進に努める所存です。

今後とも、何卒ご指導、ご鞭撻を賜りますようお願い申し上げます。



早川 隆

【准教授】 生体機能医学系薬理学分野
令和6年4月1日就任

令和6年4月から薬理学分野の准教授（臨床試験研究センター兼務）を拝命しました早川隆と申します。薬理学分野・臨床試験研究センターでは、浅井・高橋両教授が高い先見性をもとに構築されてきた電子カルテデータベースを用いて薬剤の効果・副作用に関する新知見を得ようと研究していますが、私はそこに専門である機械学習・AIの手法を取り入れることで得られる知見を質・精度の両面で飛躍させられないか試みています。従来の医療統計手法の代わりに機械学習を用いて薬剤効果を推定するためにはいくつかの技術的ボトルネックを解決する必要がありますが、逆に言えば新

たな分野を開拓できる可能性が秘められており、意欲的に取り組んでいます。またいずれの医学分野においてもこのように豊富なデータを利用して仮説を検証する研究が今後ますます重要になると考えられ、学生さんには伝統的な薬理学のカリキュラムに加えて、実習を通して早期から医学データの扱いに慣れ親しんでいただけるよう取り組んでいます。これらの研究・教育を加速させつつ日本大学医学部の発展に貢献できるよう、今後各医局の先生方と連携しつつ尽力したいと考えておりますので、何卒ご指導・ご鞭撻のほどよろしくお願ひいたします。



齋藤 圭

【准教授】 内科学系消化器肝臓内科学分野
令和6年4月1日就任

2024年4月1日付で、内科学系消化器肝臓内科学分野の准教授を拝命いたしました。私は2007年に新潟大学を卒業後、東京大学医学部附属病院で初期研修を行い、同大学の消化器内科に入局いたしました。三井記念病院で消化器内科の基礎を学び、大学に戻った後は胆膵領域を専門とし、診療にあたってまいりました。大学院では膵癌術前化学療法をテーマに臨床研究を行い、2017年に修了いたしました。その後、胆膵内視鏡および胆膵癌の薬物療法を専門分野として研鑽を積んでおります。

2022年4月より日本大学医学部内科学系消化器肝臓内科学分野に異動し、現在に至っております。赴任当初は消

化器癌に対する薬物療法を行っていませんでしたが、消化器外科の先生方のご理解・ご協力を得て、胆膵癌の薬物療法を当科で実施できるようになりました。現在では近隣の医療機関との連携も深まり、多くの患者様をご紹介いただいております。

胆膵癌は他の癌種と比較して、薬物療法の中心である免疫療法や個別化医療の進展が遅れており、予後の非常に悪い悪性腫瘍です。これまでの経験を活かし、胆膵癌の早期診断や治療法の開発に尽力し、日本大学医学部消化器肝臓内科学分野が胆膵癌診療・研究の拠点となることを目指してまいります。今後ともご指導ご鞭撻のほど、何卒よろしくお願い申し上げます。



藤城 緑

【准教授】 内科学系糖尿病代謝内科学分野
令和6年4月1日就任

令和6年4月1日付で糖尿病代謝内科学分野の准教授を拝命いたしました。私は平成7年に九州大学を卒業し、東京大学医学部附属病院、JR東京総合病院、さいたま赤十字病院で内科研修を終了後、平成9年に東京大学大学院内科学専攻博士課程に入学し、筋肉や脂肪細胞のインスリンシグナル伝達におけるMAPキナーゼ経路の役割について研究しました。平成18年より糖尿病・代謝内科 助教、平成25年より特任講師を務め、平成27年に当局に入局致しました。主な勤務地は日本大学病院で、着任以降、同院を日本内分泌学会認定教育施設に導くとともに、多職種から成る栄養

サポートチーム（NST）を立ち上げて、病態栄養専門医研修認定施設および栄養管理・NST実施施設の認定に導きました。また、多職種による肥満症治療チームを発足させ、日本肥満学会認定肥満症専門病院へと導きました。令和3年10月に、糖尿病・肥満症治療センター長を拝命し、保険診療による腹腔鏡下スリーブ状胃切除術実施施設基準達成に尽力しました。糖尿病や肥満症は、新薬の開発が進められており、外科治療と併せて多様な治療選択肢があります。後進の指導を行いつつ、患者様から選んでいただける施設に発展させられるように、尽力してまいります。ご指導ご鞭撻のほどよろしくお願い申し上げます。



前林 亜紀

【准教授】 産婦人科系産婦人科学分野
令和6年4月1日就任

令和6年4月1日付けで産婦人科系産婦人科学分野准教授を拝命いたしました。

私は平成16年3月に本学を卒業後、平成18年に日本大学産婦人科学教室へ入局いたしました。板橋病院、川口市立医療センターでご指導を頂きながら、周産期分野で学位を取得させて頂き、その後平成26年より駿河台日本大学病院、その後日本大学病院で勤務しております。

現在私は、日本大学病院で低侵襲治療である内視鏡手術を中心に診療に携わらせて頂いております。内視鏡手術では、短時間、低侵襲な手術でありながら、様々な症状に悩まれている患者様のQOLを劇的に改善できることも多く、大変やりがいのある領域です。日々研鑽をつみ、高い安全

性と技術を提供させていただけるよう、日本大学病院産婦人科が多くの医療連携の先生方や患者さんに選んで頂けるよう努めて参ります。

また現在、様々な医学部教育にも携わらせて頂いております。医学部学生の臨床実習においては、Student Doctorとして、指導医のもと、主治医のひとりとして診断や治療を経験し、卒後は医師としてそれらを実践できる力が必要とされております。卒後社会において様々なかたちで活躍できる医師を養成できるように、また、「日本大学医学部に入学し、学べてよかった」と母校を誇りに思ってもらえるように、学生教育にも従事してまいりたい所存です。今後とも、ご指導ご鞭撻の程賜りますよう何卒よろしくお願い申し上げます。



松本 光司

【准教授】 整形外科系整形外科学分野
令和6年4月1日就任

令和6年4月1日付で整形外科学系整形外科学分野の准教授を拝命いたしました。私は平成18年に日本大学医学部を卒業し、初期臨床研修の後、平成20年に日本大学医学部整形外科学分野に入局をしました。各出張病院で整形外科の研鑽を積んだのち、脊椎脊髄外科を専門としました。平成29年にはアメリカトレド大学に留学をする機会をいただきました。現在は、中西一義教授のご指導のもと脊椎脊髄外科学の臨床ならびに研究を行っております。

臨床においては低侵襲な全内視鏡下脊椎手術から、高侵襲な成人脊柱変形に対する変形矯正固定術まで幅広く執刀

しております。研究においては、基礎研究テーマが有限要素法を用いた脊椎生体力学とポリエチレンを用いた脊椎後方制動システムの開発であり、臨床研究テーマは、骨粗鬆症性椎体骨折に対する手術療法と頸椎滑り症です。

多くの先輩方に支えられながら、今日があることに心から感謝しております。大学の責務である臨床、研究、教育を通じて、先輩方からいただいた恩を後輩たちに送っていくことで、日本大学の発展に貢献していく所存です。ご指導ご鞭撻のほどよろしくお願い申し上げます。



李 賢鎬

【准教授】 整形外科系整形外科学分野
令和6年4月1日就任

この度、本学整形外科学分野の准教授を拝命致しました李賢鎬と申します。私はリウマチ外科と膝外科を専門とし、関節リウマチや変形性膝関節症の治療に注力してまいりました。リウマチ患者さんの関節機能を維持し、膝関節疾患患者さんが「歩く楽しみ」を長く続けられることを目指して、画一的に人工関節を行うのではなく、可能な限り関節温存を考え、骨切り術によるアプローチにも積極的に取り組んでおります。

また、これまでに、関節滑膜マスト細胞に関するリウマチの基礎研究、近年ではリウマチ手術の「Key surgery」

とよばれる前足部手術の足底圧変化の研究、さらには人工膝関節や膝周囲骨切り術の術中指標に関する研究を行い、これらを発展させることで、より良い治療成果の提供を目指しております。

リウマチ外科と膝外科の知見を活かし、科学的根拠に基づいた最善の治療を提供するとともに、患者さん一人ひとりのニーズに合ったアプローチを重視してまいります。今後とも患者さまの健康と生活の質向上を目指し、その患者さんが「自分の家族ならどうするか、どうしてほしいか」と常に考えながら、誠心誠意尽力してまいりますので、どうぞよろしくお願い申し上げます。



小橋 優子

【准教授】 放射線医学系放射線医学分野
令和6年5月1日就任

令和6年5月付で放射線医学系放射線医学分野の准教授を拝命いたしました。私は平成10年聖マリアンナ医科大学を卒業し、同年聖マリアンナ医科大学病院で臨床研修を始めました。2004年に聖マリアンナ医科大学大学院で博士号を取得後、Massachusetts General Hospital と Cleveland Clinic への留学の機会を頂き、主に骨軟部画像診断の研鑽を積んできました。聖マリアンナ医科大学では非血管系 IVR（主に胆道 IVR）と整形領域の画像診断の二刀流でしたが、平成22年4月から慈恵会医科大学放射線医学講座に異動してからは

整形領域の画像診断、特に足関節・足部とスポーツ整形の画像診断を中心に携わっていました。その後平成24年に東京歯科大学市川総合病院に講師として出向した際には骨軟部腫瘍の画像診断に触れる機会が多くなり、腫瘍に対しての知識も深まったと思います。現在ではこれらに加えてあらたな核医学検査の導入や後進の教育に勤んでおります。今後は医学生、研修医、放射線科医の指導に微力ながら精一杯務めさせていただきます。ご指導を何卒よろしくお願い申し上げます。



松本 直樹

【准教授】 内科学系消化器肝臓内科学分野
令和6年4月1日就任

令和6年4月1日付けで内科学系消化器肝臓内科学分野准教授を拝命致しました。

私は平成13年に日本大学医学部を卒業し、研修医から当初は駿河台日本大学病院の消化器内科で勤務し、2年間の虎の門病院肝臓科での研修を経て、平成24年より板橋病院で勤務をしています。

専門は肝臓内科学で、特に超音波診断学を中心に研鑽を積んでまいりました。板橋病院では令和3年に超音波室長を拝命し、検査技師、研修医、看護師の技術指導を行っています。近年、世界的にも Point of care 超音波(POCUS)と呼ばれる、検査目的を絞った超音波検査が注目されてい

ます。医学部内の超音波の有効活用や技術レベルの向上ができるよう、引き続き尽力したいと考えております。超音波教育は院外でも学会主催のハンズオンセミナーや試験委員、精度管理などの活動をしております。

診療面では肝細胞癌の化学療法、IVR治療（ラジオ波焼灼療法、肝動脈塞栓療法）、食道静脈瘤の内視鏡治療を含めた門脈圧亢進症の治療などに加え、消化管出血のIVR治療も行っております。

今後も肝疾患と超音波診療を中心に皆様のお役に立てるよう活動して参りますので、ご指導ご鞭撻のほど、宜しくお願ひ申し上げます。



佐伯 忠賜朗

【准教授】 視覚科学系眼科学分野
令和6年5月1日就任

令和6年5月1日付で眼科学分野の准教授を拝命いたしました。私は平成11年に名古屋大学を卒業後、市中病院勤務を挟みつつ東京大学大学院、東京女子医科大学勤務を経験し、令和4年4月より本学に在籍しております。大学院ではプロスタグランジンによる眼圧下降効果に関する眼薬理を介して研究の深淵さを垣間見、卒業後は緑内障手術および網膜硝子体手術を主な専門として研鑽を行なって参りました。特技としましては眼内内視鏡を用いた手術がございます。日大板橋病院の眼科は国内でも有数の角膜移植施設

であり、角膜混濁を有して更に緑内障ないし網膜硝子体疾患を併発する症例も多く、これらの症例に対応するために眼内内視鏡を用いた内眼手術はとても有効な手段と感じております。日大板橋病院はこれまでの任地に比してもとても仕事がしやすく、このような場を与えて下さる大学、教室、スタッフの皆様そして山上聡主任教授には日頃より感謝致しております。今後はこれまでに自身が身につけた知識・技術を積極的に後進に伝え、本学および教室の維持・発展に微力ながら努める所存です。今後ともご指導ご鞭撻の程、何卒よろしくお願ひ申し上げます。



田岡 誠

【准教授（任期制）】 外科学系心臓血管外科学分野
令和6年5月1日就任

令和6年5月1日付にて、外科学系心臓血管外科学分野准教授を拝命致しました。

日本大学医学部を平成13年に卒業後、第2外科に入局し、一般外科を研修しました。その後、東京臨海病院、岡谷塩嶺病院での勤務を経て、心臓血管外科に専念することを決意いたしました。平成19年に人工臓器移植学で学位を取得後は、綾瀬循環器病院にて救急医療に従事し、平成25年に心臓血管外科専門医を取得しております。

田中正史先生が主任教授として母校にご着任されたことを契機にお声がけを頂き、これまでの経験を母校の発展に

少しでも貢献できればという思いと、外科医としてもう一步成長したいという気持ちで、平成29年再び日本大学でお世話になることに致しました。専門は成人心臓血管外科手術全般ですが、板橋病院では今後心臓移植を必要とする患者様への補助人工心臓の植え込みや、再生医療の治験など大学病院ならではの治療に携わりました。令和4年からは日本大学病院に赴任し、小開胸低侵襲心臓手術など、新たな治療法に取り組んでおります。

大学を取り巻く昨今の厳しい状況を踏まえ、微力ながら自分にできることを考え、一つ一つ実行してまいります。何卒宜しくお願ひ申し上げます。



中村 一博

【准教授（任期制）】耳鼻咽喉・頭頸部外科学系耳鼻咽喉・頭頸部外科学分野
令和6年5月1日就任

令和6年5月1日付けで耳鼻咽喉・頭頸部外科学分野の准教授を命名いたしました。

しました。

私は平成8年に東京医科大学を卒業しまして、同時に東京医科大学耳鼻咽喉科学教室へ入局いたしました。平成12年に東京医科大学大学院を修了しています。平成13年に東京医科大学八王子医療センター耳鼻咽喉科頭頸部外科へ異動し、主に頭頸部癌治療に係りました。平成18年には国内最高峰の音声外科手術センターである一色クリニック京都ボイスサージセンターで研鑽してまいりました。平成20年に東京医科大学八王子医療センターへもどり講師となり、平成23年には同科長を務めました。平成

24年にドイツ・マールブルグ大学耳鼻咽喉科へ赴任しヨーロッパの耳鼻咽喉科学を学びました。平成25年に臨床准教授として東京医科大学八王子医療センターへもどり、平成26年からは戸田中央総合病院耳鼻咽喉科部長として地域医療を学びました。

大島猛史先生のご高配により、平成30年から日本大学医学部耳鼻咽喉・頭頸部外科学分野へ診療准教授として参りました。以後あつという間の6年間を経て、現在に至ります。

専門は上記のごとくの頭頸部癌と音声外科手術です。専門性を生かし、日本大学医学部へ、臨床・研究・教育において貢献できればなによりです。



諸橋 環

【准教授】小児科学系小児科学分野
令和6年5月1日就任

このたび森岡一朗主任教授のご高配を賜り、令和6年5月1日付で小児科学分野の准教授を拜命いたしました、諸橋環です。

私は新潟で生まれ育ち、平成10年に神戸大学を卒業しました。同年、新潟大学医学部小児科学教室に入り、新潟県内の病院で小児医療に従事いたしました。平成15年より新潟大学医学部附属腎研究施設で腎臓の基礎研究に従事し、主に腎臓の発達過程における上皮細胞障害の影響について、また尿蛋白出現の機序について研究を行い学位を取得しました。その後、小児腎臓病を専門として、新潟大学医歯学総合病院小児科で、小児の腎炎、ネフローゼ症候群、先天性腎尿路異常、腎移植などの診療を行いました。

平成16年、高橋昌里前主任教授のご高配で日本大学医学部小児科へ迎えていただき、助教を拜命しました。これまで臨床研究として、幼児健診での尿検査を用いた先天性

腎尿路異常のスクリーニング方法を開発し、慢性腎不全の原因の早期発見に貢献しうる成果をあげました。また、他施設共同研究として、小児難治性ネフローゼ症候群における数種類の医師主導治験を行ってきました。

日本大学医学部附属板橋病院では、平成31年から小児科病棟医長、令和元年から小児科救急担当医長を務めております。当院の小児科は、あらゆる重症度の小児を受け入れ、高次医療や先進医療を提供する、極めて高いアクティビティとポテンシャルを持った部署です。ここで医療に従事するなかで、救急医学、災害医療、小児の虐待、予防のための小児の死亡検証（Child Death Review）などの専門以外の分野について学ぶ機会を得、活動の幅を広げることができました。

これからも、恵まれた環境に感謝し、新しい診療の開発・発信、学生や若手医師の育成に努めて参ります。



岡橋 彩

【准教授】 小児科学系小児科学分野
令和6年7月1日就任

日本大学小児科学系小児科学分野准教授を拝命致しました岡橋彩です。私は2003年に日本大学医学部を卒業し、小児科に入局しました。当時の主任教授は原田研介先生で、実は並んで撮った写真と原田先生が胸につけていた病院ネームケースを私のデスクの引き出しに潜ませています。教授陪席で感じた「医師としてのプロフェッショナルリズム」が小児科医としての原点にあるからです。小児科初期研修終了後は、小児科の中でも新生児をサブスペシャリティとして選択しました。東京都立豊島病院、大塚病院で尊敬できる指導医に恵まれ、3人の子育てをしながらも十分に臨床力

を培うことができました。そして大学に戻り、医師の技能として「臨床」の次のステップ、「教育」「研究」を扱う職位を頂きました。教育は、学生、研修医、専攻医それぞれの未来を見据えたプログラムを提供することが必要だと強く感じています。研究は、現主任教授森岡先生が母子感染のパイオニアであり、幸いにも学ぶ場を頂きました。また、超早産児神経発達症の研究も行っており、医局員とともに研究をする体制が整っています。この度の職位の重責を感じておりますが、微力ながら当分野、当学の発展に貢献させて頂きたいと思っております。



道宗 明

【准教授】 麻酔科学系麻酔科学分野
令和6年7月1日就任

令和6年7月1日付けで麻酔科学系麻酔科学分野准教授を拝命いたしました、道宗明（どうしゅう あきら）と申します。「みちむね あきら」でもなければ「みち むねあき」でもありません。生まれは青森県八戸市で、平成17年に弘前大学を卒業後、十和田市立中央病院で初期臨床研修を行ったのち、平成19年より自治医科大学附属さいたま医療センターにおいて後期レジデントとして麻酔科の修練を積んでまいりました。平成30年1月より国立国際医療研究センター病院、イムス富士見総合病院勤務ののち、令和2年4月

1日より日本大学医学部麻酔科学系麻酔科学分野教室にご厄介となっております。

日本大学卒の医局員はあまり気にしたことがないのかもしれませんが、筋弛緩研究と言えば、日本大学医学部麻酔科が日本一だと思います。外部にいた頃、私は勝手に「筋弛緩研究分野の総本山」と崇め奉っておりましたし、その一員となれたことは非常に喜ばしいことです。体力の続く限り教室の発展に尽力しようと思っておりますので、今後ともご指導ご鞭撻のほど、何卒よろしくお願ひ申し上げます。



小池 祐哉

【准教授】 放射線医学系放射線医学分野
令和6年9月1日就任

2024年9月1日付けで、放射線診断科の准教授を拝命いたしました。私の専門はIVR（インターベンショナル・ラジオロジー）で、特にカテーテル治療に注力しています。前職からの同僚である本橋健司医師と共に、日本大学板橋病院で、放射線診断科や各診療科の仲間と連携し、安全で効果的なIVRを提供していきたいと考えております。

私たちの目標は、日本大学の血管内治療を通じて、病院全体の診療レベルを向上させることです。しかし、現状では血管

撮影室における放射線診断科の優先枠がなく、各診療科の合間を縫ってIVRを施行しています。また、使用している血管撮影装置が古く、画像解像度に限界があるため、手技の安全性や精度に不安を抱えています。

このような制約がある中でも、各診療科、各部門と協力し、機器の入れ替えを含めたシステムの改善を進めることで、より良い医療を実現できると信じています。皆様と共に学び、成長し、日本大学医学部の発展に寄与できるよう全力を尽くしますのでよろしくお願ひします。



児玉 智信

【准教授】脳神経外科学系神経外科学分野
令和6年11月1日就任

令和6年11月1日付で日本大学附属板橋病院脳神経外科において准教授を拝命いたしました児玉智信と申します。これまで、脳血管内治療および脳血管障害を専門領域とし、臨床・研究に携わってまいりました。

私は平成10年に防衛医科大学を卒業後、防衛医科大学校病院や府立成人病センターをはじめとする医療機関で研鑽を積み、平成22年には京都大学再生医科学研究所にて研究活動に従事しました。その後、東京慈恵会医科大学での脳神経外科および脳血管内治療部での勤務を経て、令和5年より現職に着任しております。

主な研究活動として、以下の分野に注力しておりました。脳動脈瘤治療のための瘤壁強化・器質化促進コイルの開発

(AMED 支援)、非磁性合金を用いた塞栓治療コイルの開発(経済産業省支援)、骨髄由来幹細胞を用いた虚血性脳卒中再生治療(グルノーブル大学との共同研究)、PEG 脂質誘導体を用いた幹細胞ターゲティング療法(東京大学との共同研究)。これらの研究を通じて、医療現場の課題解決と新たな治療法の開発に取り組んでまいりました。現在、脳血管内治療でのロボット制御に取り組んでおります。また、脳外科専門医・指導医、脳血管内治療専門医・指導医、脳卒中専門医・指導医として、後進の育成にも力を入れております。これからも患者様一人ひとりに最善の医療を提供するとともに、研究と教育の分野においても日本大学の発展に貢献していきたいと考えております。どうぞよろしくお願い申し上げます。

